
卒業

逢坂桜

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

卒業

【Nコード】

N5210B

【作者名】

逢坂桜

【あらすじ】

恋愛は、誰にも訪れる。高校生の彼女にも、娘を持つ父親にも。夏休みの終わった2学期。斉藤千晴の幼なじみ・森水優生の死は、ひっそりとした彼女の存在感と同じく、沈んでいく……

第一部 - 斉藤千晴 -

森水優生は、その名のとおり優しい子だった。

あたしみたいな、ちょっといっちゃった女子高生にも。

優生は死んだ。

何事もなかったような顔をして、2学期は始まった。

初日は始業式とHRだけ、昼前に校舎に人影は少なかった。

あたしは、窓際の自分の席に座ったまま、教室に残っていた。

「・・・」

優生の席は、もう片付けられていて、担任は「事故で死んだ」と説明した。

影の薄い子だったから、あつたはずの机を見ただけの子もたくさんいたけど、中には知っている子もいたんだろう。

事故は事故でも本当は、なんて声もした。

時計を見ると11時半になるうとしていた。

そろそろ出たら、ちょうどいい。

化粧道具だけ入れた軽いカバンを持って、あたしはトイレに向かった。

トイレの鏡の前に立つ。

「・・・」

なんだかばやけたように見える。

優生が死んで1ヶ月。

ポーチからいろいろ取り出して塗ってはみるが、鏡のあたしはぼやけたまま。

ム力ついて、最後には全部落としてしまった。

もう一度、鏡を見る。

「・・・」

こんな顔を、精彩がない、というのだろうか。

思いなおして、ファンデーションを塗って、薄いリップを塗ってみる。

この程度で我慢しよう。

後から女子二人が固まって入ってきた。

あたしは道具を手早く放り込む。

「ねえねえ斉藤さん。森水さんと友達だったの？」

一人が、笑いながら話しかけてくる。

「びつくりしちゃった。お葬式に行ったら、斉藤さんがいたんだもん。ねえ」

と、隣の女子を見て、そっちがうなづく。

「近所のおばさんが言ってたけど、自殺したって本当？」

「あたしも聞いたの。電車で飛び込んだのに、遺書はなかったって」

笑いながら優生の話をする女どもをにらんで、あたしはカバンを持った。

「斉藤さん。援交してるって本当？森水さんもしてたの？」

「素人じゃなくて、ヤクザがやってる本格的なヤツよね？森水さんにはキツイよ」

「あんたらがテレクラで安売りしたって、同じコトになるよ」
言い捨てて出た。

「そんなドジ踏まないよ！」

後ろから聞こえた。

学校から歩いて30分で、市立図書館に着く。

始業式の日、12時の待ち合わせ。

ドアを開けると、いきなりクーラーの冷気に包まれる。

まだ夏休みの大学生や、宿題の終わってない学生がうろろしている。

奥へ奥へと歩いていく。

コインロッカーにカバンを入れて、リファレンスコーナーに入る。

ここは、いつも人が少ない。

2列×3つあるテーブルの、一番奥の窓もないテーブル。

適当な新聞を取って、音を立てないように椅子を出して座る。うるさくしなければ、みんな黙って本を読んでいる。

行き場所のない親父が大半だと聞いた。

早足の、いかにもサラリーマン、といったスーツの男が入ってくる。

あたしの前に折った紙を置いて、出て行った。

入って出て行く道順は、人のいないトコばかり歩いていた。

開くと、ホテルの名前とルームナンバーだけ書かれている。

「・・・」

こんなとこに出入りしてるから、あんなコト言われるんだ。

5分待つてから、図書館を出て、ホテルに向かう。

まだ夏なんだ。

汗がにじんできて、ハンカチで押さえる。

「・・・」

優生は最終電車に飛び込んだ。

怖がりで、いつも自分の服の裾をにぎりしめてた優生が、どんな顔でそんな恐ろしいことを。

小学生の集団が、なにかわめきながらあたしを追い越していく。なに食べてれば、あんなに動けるのか。

もう若くないのかも、なんて、思ったりした。

今日のホテルは、前の前に会った時と同じホテル。
明るいロビーからエレベーターホールへ行く。

制服のままだから、固まったおばさんが横目を細めてあたしを見て
いる。

高校生でもおばさんでも、ああいう女は、きっと生まれた時からあ
んなババアなんだ。

エレベーターを降りると、明るい廊下に人は居なかった。
ルームナンバーを見て、チャイムを鳴らす。

ため息ひとつ分の後、ドアがほんの少しだけ開けられる。

誰かに見られる危険があるから、ギリギリだけ開けて、すばやく部
屋に入る。

眼が合う。

男は、昔から顔だけは知っていた、森水優生の父親である。

スーツの上着を脱いで、ネクタイも外して、テーブルにあるサンド
イッチを食べていた。

おなかには空いてたけど、食べたくなかった。

食欲なんて、いまだけは、ない。

「ケーキ食べたいの。メニュー見せて」

差し出されたメニューを見る。

ケーキやパフェやフルーツの盛り合わせ、サンドイッチやランチセ
ットがいくつかに、和食のセットも。

「やつぱりいらない」

メニューを突き帰す。

「食べたいものを言っている」

「だから、ソレにないの。いらない」

テーブルにメニューを放り出した。

いつものやりとり。

食欲なんてないのにメニューを見て、ほしいものがないからいらな

い、と言う。

「・・・優生の形見分けをする。なにかあるか？」

「形見分けて、なんなの？あの子のもの、人にあげちゃうの？」

「近しい人に渡して、優生を偲んでもらうんだ。なにかないのか？」

壁にある絵のほうを見る。

電気のついてない部屋には、大きな窓から光が差し込む。

クーラーは弱。

あたしは、強いのはすきじゃない。

ノースリーブに長袖のシャツを着てたから、夏じゃなかったけど、そう言った。

5月7日、初めてホテルに行った。

「・・・優生のハンカチ。オレンジとグリーンのセット。

あれ、あたしが誕生日にあげたの。

あの子のことだから、もしかしたら使っていないかもしれないけど。

あれがいい」

「見ておこう」

「話、それだけ？」

男はあたしと眼を合わせて、それからベッドを見た。

「優生の話した後、父親と？冗談やめてよ」

「・・・」

ソーサーからカップを持って、飲んでいる。

今日は、コーヒー？紅茶？砂糖は入ってるのかな。

「・・・シャワー使うから、入ってこないでよ」

乱暴に歩いて、バスルームに入る。

カギをしめて、うずくまって声を殺した。

肌を滑っていく。

指、唇、あつい息。

みつともないくらい、あたし、生きてるって実感する・・・

重みが消えて、時間をかけて火照りが遠のいていく時、優生を思い出す。

はじめて、あの子から話しかけてきた、あの時のこと。

「さいとうちはるちゃん？ちーちゃんてよんでいい？」

小学校1年、同じクラスだったけど、苗字順に並んでいたから、離れていた。

あたし斉藤、あの子は森水。

なのに、あの子、まっすぐにあたしの前に来て、そう、言った。ちいさな手が、真っ白になるまで力込めて、服の裾を握ってた。

あたし、忘れない。

交代でシャワーして、最後にお茶を飲む。

この時飲むのは、いつも紅茶。

「・・・優生の日記を見つけた。ずいぶん、苦しんでいたようだ・・・」

「あたりまえじゃない。バカな男にだまされて、妊娠したんだから」

「その、そんなに評判悪いのか？その男は」
言いにくそうに言う。

自分がやっていることを考えたら、ひょっとして、言えないこと？

「優生が知ってたかどうか。あの子、そういうのうといから。でも、ワリと有名よ」

「どうしてそんな男が教師を・・・？」

「・・・妊娠までしたのは、優生だけ、だと思う。生徒のほうが発熱上げて、つてのなら、山ほどあるだろうけど」

「まさか、教師、とはな」

優生の相手は、妊娠した子供の父親は、うちの学校の教師だ。

教師との恋愛で、誰にも、あたしにも言えなかった優生は、そいつとつきあいはじめてから、新しい日記帳を用意して、毎日の小さな

ことを書き残していた。

それは、少女趣味な装丁とは無縁な、授業に使うようなシンプルなノートだった。

毎日、持ち歩いては、恋愛を書き残していた。

「校長とか教育委員会とか、出るとこ出れば、一発でしょ」

「・・・優生をこれ以上、辱めたくない」

「・・・」

「殺してやりたい、が、優生の一生がさらに無意味になるようにで

・・・」

あんな男にひっかかっていたなんて。

あんな男の子供ができたからって、死んでしまうなんて。

優生。

優生。

どうして？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5210b/>

卒業

2010年10月30日10時14分発行